

放送大学・面接授業：「♪ドレミとトトロ」で英語「楽」習 — "楽しい、本当に楽習だ！ しかも発見がいっぱい！"—

山田昇司
(岐阜・朝日大学)

<目次>

はじめに—事務局の方から「こちらまでうれしいかぎり」

1. 英語でもやってみた「名前リレー」— "となりの" の不思議な連鎖
2. 自動修正されていったシラバス—「時間を忘れるくらいだった！」
3. リズムよみと歌声が広がる教室—「前で」「歌う」へ導くステップ
4. 素朴な質問が問うているもの—母語力、英語史、AI 翻訳力
5. 重いところの扉を開く「自己紹介」—和やかな雰囲気です英語学習
6. すべて持ち帰られた抜き刷り—再び「放送大学の学生はやはり違う！」

おわりに—新たな授業づくりへの挑戦

<註>

<引用文献>

<資料>

はじめに—事務局の方から「こちらまでうれしいかぎり」

今年度（2018年度）の放送大学・面接授業（5/26、27）を無事に終えることができた。この「無事に」という言葉には今回は特別な意味が込められている。というのは、私は五月の連休明けに足を滑らせて右肩を骨折し当日は左手しか使えない状態だったからである。怪我をした翌日はそのときに切れて縫合した鼻下の出血も少しあって休講を出したが、美紀子先生から話を聞かれた寺島先生からは心配されてお電話をいただいていた。

面接授業を終えたその晩に事務局の方からさっそく受講生31名のアンケート（無記名）がPDF添付で送られてきたが、そのメールの文面には「受講者の評価も大変高く、こちらまでうれしいかぎりです」とあった。またアンケート結果や裏面に書かれたいくつかのコメント（註1）にも大いに励まされた。これはぜひともお二人にお知らせしなくては、と書いたのが先日に研究所掲示板（6月2日）で紹介されたメールだった。（註2）

二日後には授業レポート（記名）も届いた。私はA4用紙一面にびっしりと書かれた文面を何度も何度も読み返しながら、自分が寺島メソッドに出会って英語教師をしている幸運を感じずにはいられなかった。その授業レポートはどれもこれもその人の思いがいっぱい詰まっていて、キーボードを思うように打てない私はこれをそのまま今回の授業報告に

代えてもいいのではないかとすら考えたほどだった。しかしやはり教師の立場からも書き留めておきたいことがいくつもあり、左手だけで打つことにした。

さて、直前にこのような思いがけないハプニングに見舞われたものの、今回の面接授業はすこし心にゆとりがあった。というのは、もちろん二度目ということはあるが、今回の「♪ドレミとトトロで英語「楽」習」では視聴資料がいくつもあって、それを織りまぜればきっと上手くいくだろうとの目算があったからだ。

以下に示すのが前年8月に提出していたシラバスである。その後に視聴資料としてNHK「らららクラシック」で放送された番組(30分)や平井堅のCD「古時計」も準備した。またシラバスの注には「定員36名」「6人ずつのグループに机配置」と記載されていた。

< 2017年8月作成シラバス >

科目名 「♪ドレミとトトロで英語「楽」習」

- 第1回 英語の歌① Do-re-mi Song 一和訳&リズムよみ
- 第2回 グループ発表 英語の歌② Edelweiss 一和訳&リズムよみ
- 第3回 グループ発表 映像視聴『Sound of Music』(英語音声、日本語字幕)
- 第4回 英語の歌③ My Grandfather's Clock 一和訳&リズムよみ
- 第5回 グループ発表 映像視聴『となりのトトロ』(英語音声、英語字幕)
- 第6回 読解プリント①
- 第7回 読解プリント②
- 第8回 グループ発表(3曲) 授業レポート&アンケート

このシラバスを見て36名が受講登録したが、当日欠席が5名あり31名がこの授業に参加した。岐阜県だけでなく愛知や三重、さらには静岡、遠くは福井からの受講生もあった。年齢層について言うと、23歳から80歳の方がおられた。

昨年の放送大学面接授業を総括した山田(2018)では時系列で授業の様子を紹介していたが、本稿ではそれにこだわらずに授業者の気づいた点を順に挙げながら実践の考察を深めていきたい。

1. 英語でもやってみた「名前リレー」— “となりの” の不思議な連鎖

この授業のための教材を準備しているときに私の頭にひとつのアイデアが浮かんだ。それは最初の時間の冒頭にグループ内で「名前リレー」をすることだ。寺島先生が研究会の夕食の前にいつも実施されるグループ内でお互いの名前を覚える活動である。

そして、一日目の直前にもうひとつのアイデアも浮かんできた。それを英語でやったらどうなるだろうか、と思ったのである。一日目は日本語で、二日目は英語で「名前リレー」を行うのである。きっと *There's a Hole.* のようになるはずだと思って実際に紙の上に書いてみると、次のような対比図ができた。

私はAです。 I am A.
私はAさんのとなりのBです。 I am B next to A.

私は A さんのとなりの B さんのとなりの C です。 I am C next to B next to A.

そこで二日目の冒頭では上図を板書で説明してから英語でこの「名前リレー」をやってもらった。そしてそれが済んでから次のように色分けして記号を書き込み、前日に学んだ「センマルセン」と「後置修飾」(註3)の復習をした。

	セン セン マル	セン マル セン
私は	A (です)。	I (am) A.
私は	[A さんのとなりの] B (です)。	I (am) B [next to A].
私は	[[A さんのとなりの] B さんのとなりの] C (です)。	I (am) C [next to B [next to A]].
	前置修飾	後置修飾

いま本稿を書きながら考えたのだが、この「名前リレー」と関連づけて、次のシラバスには **There's a Hole** を取り入れると面白いのではないかと思った。幸いにも岐阜学習センター所長の岡野先生から次年度の依頼もすでに受けていて、本授業が終わるやいなや、気の早い私は新たなシラバスの構想を練っていたのだが、受講生の大半は「グループで歌うことは楽しい」とアンケートにもレポートにも書いているので次も歌は3曲入れたいと考えて候補の歌を探しているところだった。(シラバスの締切は8月中旬だが、現時点では **Hole** の他に **You Are My Sunshine** と **The Cruel War** を考えている。)

ここで話が少し横道にそれるが、「となりの」については今回の授業で次のような出来事があったので記しておく。不思議な連鎖としか言いようがない。

ひとつは初日冒頭のことである。日本語での「名前リレー」の後に私の自己紹介をしたのだが、そこでは山田(2014)から大学入学のときのエピソードをいくつか抜き刷りして読み上げた。その中に米人教師の早口英語が聞き取れず呆然としていた私を「となりの」席の友人が日本語で助けてくれたという話があった。読み終えた後で私は「授業で困ったときに頼りになるのは先生じゃなくて "となりの人" なんですよ」と言い添えたのだが、あちこちからクスクスと笑い声が聞こえてきた。

もうひとつは、「トトロ」のリーディング・マラソンをしているときのことである。ひとりの女性受講者が私に「先生、映画の最後の歌に"となりのトトロ、トトロ"という歌詞がありましたが、字幕には **next to** は出てこなかったですね」と話しかけてきた。私は「そうですね。たしか **You will be with Totoro, Totoro...** でしたね」と応じたが、彼女がそんなところに気づくほど英語字幕を注意深く見ていたことに少し驚かされた。

それから私が「**You** って誰のことかわかりますか」と問うてから「トトロは大人には見えないんですよ」と言うと、同じグループの別の人が「えー、そうなんですか」と話の輪に加わってきた。私がさらに「ネコバスが飛んでいく場面で田んぼにいたお百姓さんが顔を上げたのは強い風を感じたからですよ」「でも犬が吠えたのはネコバスが見えたんですよ」などと話していると、隣のグループからもそれを聞いて笑っている声が聞こえてきた。実に和やかな雰囲気の中でのリーディング・マラソンだった。

この教材はこれまでに何度も使ってきて、高校教師のときの出来事は山田(2005)に、ま

た大学に移ってからの記録は山田(2014)に記したが、今回新たなエピソードを私の「トトロ実践史」に加えることができた。

さて次節では、二日間に実際に行われた授業実施状況の全体像を示しながら、さらにいくつかの出来事をふりかえりつつ、今回の実践分析を深めていきたい。

2. 自動修正されていったシラバスー「時間を忘れるくらいだった！」

冒頭の節では本授業のシラバスを示したが、実際の授業進行は以下のようになった。シラバスに示した教材の順番で進めてはあったが、その進み具合や受講生の様子(表情、疲労度)を観察しながら随時に映像を挿入していくという感じだった。ある男性受講生(20代)は「山田先生は学生の気持ちをよく理解されており、楽しく on、off を使い分けて時間を忘れるくらいだった」と評してくれたが、先にも述べたように教える側に少しころのゆとりのようなものがあったからこそ、それができたのではないかと思っている。なお、下図ではグループ活動を赤字、視聴覚教材は青色で示した。

<実施状況>

- 第1回 名前リレー(日) 自己紹介 Cats catch rats.ーリズムよみ&発表
- 第2回 Do-re-mi Song ーリズムよみ&発表、和訳 映画 35分
- 第3回 Edelweiss ーリズムよみ&発表 映画の歌 10分 Do-re-mi 発表(歌)
- 第4回 Edelweiss ー和訳 映像 30分(らららクラシック)『魔法の英語』4課
- 第5回 名前リレー(英) 前時の復習 CD聴取 古時計Ⅰーリズムよみ&発表
- 第6回 古時計Ⅱーリズムよみ&発表 ⅠⅡー全員合唱 和訳 アニメ 25分
- 第7回 読解プリント「トトロ」ーリーディング・マラソン
- 第8回 映画の歌 10分 グループ発表(2曲) 授業レポート&アンケート

この図を見てもらうと分かるように3つの歌の全てで「リズムよみ→発表→和訳」という順序になっている。当初のシラバスでは3曲ともただ「和訳&リズムよみ」と記載されているだけなので、私がシラバス作成時に寺島メソッドの課題配列の原則「できる→わかる」を明確に意識していなかったことが読み取れる。いったい何年、寺島メソッドをやっているんだと我ながら情けなくなる。次年度シラバスでは最初からこのこともきちんと書き込んでおきたい。

なお、上図の「和訳」について若干の補足をしておくと、「Edelweiss」と「古時計」の和訳についてはグループ活動の側面もあった。というのは、白板に記入する和訳を当てるときに個人ではなくてグループを指名したからだ。そのときの様子を思い起こすと、グループで誰がやるのかが調整され、回答者は答えを周囲と確認してから前に出て来ていた。

白板には前もって教師が「語順訳空欄」を作り「立ち止まり訳用の下線」を引いてそこに書き込んでもらうのだが、今回は教師が左手でそれをやっていたので、この和訳タイムは時間がゆっくり流れていった。このことについてある女性受講生(60代)は「先生、左

手で字を書かれてまで本当に大変だったと思います。でも私にとってはゆっくり書いて頂いたので写すこともできたし、頭の方も混乱しないで良かったです」と書いていた。この和訳の時間は「リズムよみ→発表」という「動」のあとに来るまさに「静」の時間になっていて、学習者は自分の頭でじっくりと考えることができたのである。

もし私の利き手が使えていたら、訳を言わせて自分で白板に書いていたかもしれない。まさに厄転じて福となったのであるが、これまで自分がずっとやってきた授業についても学習者の視点からもう一度見直す必要があることを再認識させられた出来事であった。

第4回目の授業についても若干の補足をする。第一日目の最後の授業である。このときは映像の終了時刻を読み誤り 25 分ほど時間が余ることになった。私はそのとき機転を利かせてオプションとして教材群に加えていた『魔法の英語』の第4課（解答付）をやるように指示した。この映像「らららクラシック」は映画『サウンド・オブ・ミュージック』の中の歌のいくつかを紹介するものであったが、最後に Climb Every Mountain だったので第4課はちょうどぴったりの内容だったのだ。次年度も今回のような不測の事態に備えて教材を揃えておくことが必要だと思った。

3. リズムよみと歌声が広がる教室—「前で」「歌う」へ導くステップ

さて本節では発表のさせ方について少し考えてみたい。前節で示した実施状況図から8回の発表を拾い上げて順に並べてみると次のようになる。

第1回目	第2回目	第3回目	第4回目	第5回目
Cats catch rats.	→ Do-re-mi	→ Edelweiss	→ Do-re-mi	→ Grandfather's I
グループ	グループ	グループ	グループ	グループ
その場で	その場で	その場で	前で	その場で
立って	立って	立って	立って	立って
リズムよみ	リズムよみ	リズムよみ	歌う	リズムよみ

第6回目	第7回目	第8回目
→ Grandfather's II	→ Grandfather's I II	→ Do-re-mi & Edelweiss
グループ	全員	グループ
その場で	その場で	前で
立って	座ったままで	立って
リズムよみ	歌う	歌う

厳密に言えば、Grandfather's I IIはクラス全員がみんな一緒に着座のままで歌うわけだから「発表」にはならないのだが、最後の発表に繋がる重要なステップと考えて上図に加えた。この発表形態の選択は、教師がとくに意識せずに直観的な判断で実施したものであったが、結果的には、太字で示したように最後には「既習の曲をすべて前で歌う」というゴールに向かっていたのである。このことは次のような5つの観点で整理できるかもしれ

ない。

	易しい	→	難しい
教材の難易度	Cats catch rats.	Do-re-mi / Edelweiss	Grandfather's Clock
発表の単位	全員で		グループで
発表の場所	その場で		前で
発表の状態	座ったままで		立って
発表の形態	リズムよみで		歌って（視唱）

いま「既習の曲をすべて…」と述べたが、最後の発表（第8回目）が Do-re-mi と Edelweiss の2曲になっていることについてその経緯を記しておく。実はこの発表に先立って私はシラバスにあるとおり「3曲やってください」と受講生に告げていた。ところが発表前の練習タイムに教室を巡っているときに「先生、全部やるんですか」と聞く女性がいた。そう言われて私は発表に割り振っていた20分間では6グループすべてが発表を済ませることができないことに初めて気づいた。このままだとこの後のレポート記述時間が短くなってしまふところだった。そこで前言を撤回して「3曲から好きなのを2曲選んで」と指示を改めたのだった。発表が終わって時計を見るとちょうど20分経っていて私は思わず「びっくりでした。2つにしてよかったですね」と言うとき共感の笑い声が広がった。

もうひとつ、このことも書き記しておきたい。それは3時間目の最後に行った発表（第4回目）のときのことである。最後に発表したグループには音楽に心得がある人がいた。その女性は映画の一場面を参考にして Do-re-mi の歌の最後の2行に自分のソロを入れて重唱にして、締めくくりにも一節を追加して全員の斉唱でまとめるという工夫をした。

全員	So do la fa mi do re
ソロ	Do re mi fa
全員	So do la ti do re do!
ソロ	so la ti -----
全員	Do re mi fa so la ti do so do!

発表が終わった後でひととき大きな拍手が起こったのは言うまでもない。私も思わず「すばらしい！」と叫んでしまった。時計を見ると授業時間はまだ10分残っていたが私は思わずと口走ってしまった。「あまりにすばらしいのでこの授業は10分早く終わります」。いま考えるとあまり論理的な文ではないが、受講生からは一斉に歓迎の声があがった。先に「楽しく on、off を使い分けて時間を忘れるくらいだった」という声を紹介したが、このような授業の off の仕方もあったということである。

私が思わずそう言ってしまったのは、私の心中に面接授業の日程はかなり過酷だと感じる気持ちがあったからかもしれない。というのも、二日間で8コマ、11時間余の集中的授業は、いかに受講生の学習意欲が高くとも、かなりハードな、ありていに言えば、無茶

苦茶な日程であることは否めないからだ。アンケートには昨年も今年も日程の改善要望が出ている。にもかかわらず、受講生の中には騒いだり居眠りをする人は皆無である。ある女性受講者（50代）は「とてもハードでしたが、心地よい疲れを実感しています」と述べている。しかし、いや、だからこそ、そんな off のしかたが時にはあってもいいのではないかと思うのである。

ただ付言すると、この10分長くなった20分の休み時間も教師は決して暇ではなかった。次の時間の最初に実施する Edelweiss の和訳の準備が必要だったからだ。先述したように私は白板にマーカーで「語順訳空欄」と「立ち止まり訳用の下線」を左手で書いていた。思ったより少し早く作業が済んだとホッとしていたら、放送大学のテキストに載っている英文の質問をする若い女性が現れて20分はあっという間に過ぎてしまっていた。

4. 素朴な質問が問うているもの—母語力、英語史、AI 翻訳力

前節の最後で若い女性の受講生から質問があったと述べたが、その質問は放送大学のテキストの英文を見せて「こんな長文はどうやって読んだらいいですか」というものだった。

私は「まず動詞を見つけてマルをつけること、そうすればいま習ったように英文がセンマルセンになるでしょう。それをセンセンマルにすれば意味が取れますよ」と答えてその英文にマルを付け始めたのだが、マルを付けるところがいくつも出てきた。そこで「こんなふうにマルがいくつも出てきたら文の節目やつなぎ目を見つけます」と言いながら角括弧や四角も付け加えていった。

私はさらに説明を続けた。「こういう記号を最初から自分で付けるのは難しいので最初は記号の付いた英文を読んで文の仕組みを理解していくことが大切です。いまやっている教材にはついてるでしょ」と答えたあたりで時間切れとなってしまったが、テキストにはフレーズ訳どころか全訳すらついていないということだったので自分で記号づけるのはなかなか大変だと思った。

この受講生はこの後にも質問に来られたが、そのときはテキストの中のある英文についてだった。その文は名詞句「no other ~」が文頭に来て there is 構文が倒置され「No other ~ is there 比較級 than...」となっていた。そこで私は「there is no other ~ 比較級 than...」の形に戻して和訳したが、よく分からない様子だった。そこで「"富士山より高い山は他にない"は"富士山は日本で一番高い"と同じ意味なんですよ」と解説するとやっと表情が柔らかい。英語力が日本語力に支えられていることを再認識させられた会話だった。

もうひとり、質問をいくつもされた男性がいた。二日目の授業開始前だった。退職後によく海外旅行をされるという方だったが、その内容は多岐に渡った。「aisle はどうしてアイルという発音になるのか」「前の座席に座りたいときは front だけで通じるか」「早く言われると聞き取れないがどうしたらいいか」「よろしくお願ひしますは、please でいいのか」「AIがあるんで英語は学ばなくてもいいのでは」等々。

私は持てるだけの知見を駆使して答えたが、「よろしくお願ひしますは、…」については上手く言えなかった。帰ってから調べてみると次のようなことが分かった。(以下は『スーパードictionary 和英辞典(第2版)』(山岸勝榮 2006 学習研究社)からの引用)

真意は「あなたの判断でうまくことを運んでください」ということである。

1. あいさつ

How do you do? I'm glad to meet you. はじめまして。どうぞよろしく。

Give Keiko my best regards. 圭子さんによろしくね。

Let's keep in touch. 今後ともよろしくお願いします。

I'm looking forward to working with you. 同上

2. 相手の裁量にまかせて

I asked him for his cooperation. 私は彼によろしくと言った。

I hope my daughter will do all right. 娘をどうぞよろしくお願いします。

Thank you for letting my son stay with you.

息子を泊めていただけるそうで、どうかよろしくお願いします。

I'm going home, so I'll leave the rest up to you.

私は先に帰るから後はよろしく頼むよ。

3. 依頼

Please favor us with your business.

ご用命のほどよろしく願い申し上げます。

上記の記述から考えると、旅行先で挨拶代わりに「よろしくお願いします」と言うならば、I'm glad to meet you. になる。そこで何かの世話になるならば、Thank you for *something*. だろうか。もし何か相手にモノを頼むときの「よろしくお願いします」ならば、Please *do something*. と言うだろうが、「プリーズ」だけでは相手に分かりづらいかもしれない。

いずれにしてもなかなかの難問であるが、この男性は授業レポートには次のように書いておられて心が少しく安らかになった。「あまり勉強する機会（英語）がなかったが、どうしてこんな発音や外国人の会話が聞き取れないかなど素朴な質問に分かりやすく答えてもらってすごくすっきりしたし、いままでの英語の学習が少し生きてきたように感じる。本当に楽しく分かりやすく充実感のあるすばらしい授業を体験できて感謝の限りです」。

5. 重いこころの扉を開く「自己紹介」— 和やかな雰囲気学ぶ英語学習

本節では第1節で少しふれた自己紹介について論じたい。ここでは筆者が大学入学時に経験した苦い思い出を山田（2014）の抜き刷りで紹介したことを述べたが、実はそれは自己紹介の後半部分であった。その前段で私は次のような語りを日本語も挟みながら行っていた。というのも、三角巾で腕を吊った教師がこの二日間いったいどうやって私たちに教えるのだろうかという心配そうな（いやむしろ「不安な」だろうか）視線を四方から感じたからであった。

I look like this, but I can teach you all right.

Because I can use my left hand. （笑い）

And of course I can speak like this with my mouth. （笑い）

Now I will tell you the story about how I have become like this.

It happened in front of my house.

It was a rainy day.
I was carrying two bags and an umbrella.
Then I lost balance and slipped on the stone steps.
I hit my nose and right shoulder very strongly.
The blood came out a lot from my nose.
But luckily it stopped soon.
What is more lucky, I didn't hit my head.
So I am here alive. (笑い)
I can teach you all right.
Don't worry.

次の作文は女性受講者（50代）の書いたものの全文であるが、その中の一節にこの自己紹介にふれた部分があるので読んでいただきたい。楽しい語り口に思わず引き込まれてしまう一文である。（この作文の一節は本稿のサブタイトルに使わせてもらった。）

英語の苦手意識があり避けて通れるものなら極力避けたいと思いつつ過ごしています。しかし単位を取らないといけないため、私にもできそうな授業があればと思っていたところ「トトロ」の文字を見つけ申請しました。苦手意識に負けそうになり当日も欠席してしまおうかと考えるほどでした。教室に入り資料の厚さに驚き、落ち込みました。

が！ 山田先生の自己紹介を聞き、ひとつ扉が開き、授業が進むにつれ、大きな扉がもうひとつ開きました。楽しい！ 本当に楽習だ！ 発見いっぱいでした。

トトロを訳していて、どうしてわかるのだろうと不思議でした。右端に単語の意味が書いてあるからだろうか。いやそれだけではない。__ () __ そして[]の印がついているからだと同じグループの人たちと話していて気づきました。

英語はセンマルセンと後置修飾、日本語はセンセンマルと前置修飾。そしてまず動詞を探すということ。それから何よりリズムで読むということ。頭と体にしっかりきざみたいです。

昨年の授業の結果の資料を拝見し、こんなにも考えていて下さるのだと知り本当に感謝しております。山田先生の授業をまた受けたいと思っています。その前にこれからは英語に親しんでいきたいと思っています。英語に対する重い扉を開けてくださりありがとうございます。

私の行った2種類の自己紹介はどちらも自分の失敗の体験を語ったものだ。だからこそ教え手と学び手の間の垣根が低くなり、心の中の重い扉を開く第一歩となったのであろう。

いま紹介した自己紹介の「怪我の顛末」の方は想定外のものだったが、前もって準備していた「恥かき話」は大学入学時の話の他にもうひとつあった。それは **Grandfather's Clock** の導入CDを聞いた後に話した子音「l と r」の発音の話である。

「いま皆さんに平井堅の歌で日本語と英語で聞いてもらいましたが、心にじんわりと染み入るすばらしい歌声でしたね。昨年の大学の後期の授業でも使ったんですが、学生の中にはテレビではほとんど見かけない平井堅の名前を知っている者がいて意外でした。私は「シムラケン」と勘違いしてないか、と念を押したぐらいです。（笑い）この歌を初めて教室で使ったのは私が高校で教えているときでした。ちょうどラーラ

さんという名前のカリフォルニア出身の女性 ALT が配属されて来ていたんですが、彼女もやはりその歌声に魅せられ、さらに彼の発音はネイティブと全く同じだと感嘆していました。そのとき私はふっと思いついて、僕の発音はどうですか、とつい尋ねたんです。すると、彼女は少しも忖度しないで、山田先生の R と L がはっきりしないときがあると言って、その場で即席の発音をレッスンを受けることになってしまいました。(笑い) こんなこと聞かなくちゃよかったなと後悔したんですが、後の祭り。(笑い) そのレッスン後は少し発音に気を付けていたんですが、面倒くさいのでいつの間にか元に戻ってしまいました。そんな好い加減なジャパニーズ・イングリッシュでも彼女と仕事をするときには何も問題はなかったんですよ。でも少し後で彼女が私の R と L の発音が気になった理由が分かりました。きっとこうだろうと。彼女の名前の綴りは(ここで白板に板書) Lara だったんです。」

この話は私が前年にした話——「必要」「損失」という言葉を「しつよう」「そんしゅつ」と間違っで発音したままで長らく日本語のネイティブ・スピーカーをやっている何も困らなかった、という話の姉妹編にあたる。

恥かき話については、実は、もうひとつある。英語とは直接に関係ない話だが、思い出したので以下に記しておく。Edelweiss の和訳のとき(第 4 回目)のことだった。各グループからの代表者が白板に書き込んでいる合間にクイズをひとつ出した。前時の最後に行った発表の楽しい余韻が私の中にもまだ残っていてそんな気になったのだ。「右手が使えなくなって特に難儀してるのがお風呂で体を洗うときで、背中の左側と左腕は家族に助けってもらってます。でも左手だけでもタオルが絞れることが分かったんですよ。みなさんどんなふうにするか想像できますか」。受講生の中には看護の仕事をしている人も多く真剣な表情でこちらに目を向けているのがわかる。私は少し間をおいてから「実はタオルを畳んでその右端を右膝の裏に挟んで固定するんですよ」と答えを言った。感嘆する声が聞こえてきた。調子に乗った私はついこんな話もしてしまった。「食事は左手でも何とか食べられるんですが、ひとつ出来なくて困っていることがあります。何だと思えます? カップ納豆が自分でかき混ぜられないんですよ」。これには大爆笑が返ってきた。上掲の作文を書いた受講生が授業を「楽しい!」と評した要因にはこのような雑談も含まれていたのではないかと思っている。

6. すべて持ち帰られた抜き刷り—再び「放送大学の学生はやはり違う!」

前節で紹介した作文の中で受講生が「昨年の授業の結果の資料を拝見し」と述べていることについても説明しておく。前年度に実施した面接授業の記録は山田(2018)にまとめ、その後「寺島メソッド」同好会の HP にも掲載したが、実は、その抜き刷りを第一日目が終わった後に配布していたのである。

私はその小冊子の小山をいちばん前の机の上に置いて次のように言った。「去年は別のミュージカル映画『レ・ミゼラブル』を用いて授業をしたんですが、そのときの様子を記録した冊子を持っています。希望者の方には差しあげます。荷物になりますが、よければ持って行ってください」。

次々と持ち帰る人が出て最初に置いた 20 冊はあっという間になくなった。どんどん追加することになり結局は人数分の 31 冊がなくなってしまった。授業レポートの中でその

冊子の中身について触れたものが2編ありそのうちのひとつが上記のものであった。もうひとつの作文も紹介する。こちらは元教員の女性の方である。

・・・また昨日頂きました先生の論文も帰宅後さっそく読ませていただき先生の授業へのご苦労がよく伝わってきました。私も2年前まで教壇に立っており学生参加型の授業のために話題提供でのグループ討論、プレゼンテーション、質疑応答など試行錯誤しつつ、押しつけにならない・教えすぎない授業をいたしておりましたので身にしみました。もし来年も先生の授業があれば是非参加したいと思っています。

「押しつけにならない・教えすぎない」のところは私と寺島先生との電話にやりとりの辺りのことを言っているのだろうか、いやそれとも…と思いを馳せる。しかし、いずれにしても、こんなふうにも読んでもらえると本当にうれしくなる。本稿もどこかの紀要に投稿して来年も再びその抜き刷りを配りたくなってきた。

「うれしくなる」と言えば、こんなことを書いた人もいる。「シラバスにあげられていた『寺島メソッド——』も事前に拝読しましたが、教える立場でないので少し難しかったです。でも、授業の進め方の様子がうかがえましたので講義中、皆さんから遅れることなく作業できた事はよかったです。」この本は参考文献の欄に名前を挙げておいただけなのだが。昨年と同様の言葉をまた使いたくなる。放送大学の学生はやはり違う！

シラバスには3冊の参考文献を挙げることができるのだが、この作文を読むと次年度シラバスに何を入れるのかの選択も気が抜けない。図書館で借りる場合が多いだろうが、入手しやすい値段の本ということも若干考慮に入れておく必要がある。いろいろ考えてみたのだが、現時点での候補は次の三冊である。鈴木孝夫『日本人はなぜ英語が英語ができないか』（岩波書店）、寺島隆吉『英語で大学が亡びるとき』（明石書店）、金谷武洋『日本語が世界を平和にするこれだけの理由』（飛鳥新社）。授業当日には陳列することも忘れないようにしたい。

また『寺島メソッド——』については「その他（特記事項）」の欄に次のような但し書きとともに書名を入れていおくつもりである。「なお、この授業は「寺島メソッド」という英語教授・学習方式を採用しています。興味ある方は『寺島メソッド 英語アクティブ・ラーニング』（寺島隆吉監修、山田昇司編著 明石書店 2016）をご覧ください。」

おわりに—新たな授業づくりへの挑戦

放送大学面接授業について私が書くのは今回が2回目である。前回の山田(2018)では最初に受講生の感想文をいくつか掲載してから、次に授業計画、教材作成について書き、実践については時系列でその記録をまとめ併せてその分析を行ったが、今回は時系列にはこだわらずに教授者の印象に残っている点を順に挙げてその問題を論じていった。(註4)

本稿の締めくくりとしてその検討をふまえた次年度のシラバスを提示する。読み物についてはこれまでに作成した教材から、語順訳付プリントⅠⅡでは「トットちゃん」からの数話を第一候補と考えている。立ち止まり訳プリントⅢについては検討中である。

科目名 英語「楽」習は♪歌と読み物で！ *赤字はグループ活動

授業計画

- 第1回 名前リレー（日本語）／音法の話(Cats)リズムよみ発表／♪ THERE'S A HOLE.リズムよみ&発表
第2回 和訳／文法の話／物語の読解Ⅰ（語順訳→立ち止まり訳→足し算訳）
第3回 ♪ YOU ARE MY SUNSHINE、リズムよみ&発表、和訳ⅠⅡⅢ
第4回 物語の読解Ⅱ（語順訳→立ち止まり訳→足し算訳）
第5回 名前リレー（英語）／前日の復習／♪ THE CRUEL WAR リズムよみ&グループ発表
第6回 和訳ⅠⅡⅢⅣ／物語の読解Ⅲ（立ち止まり訳→足し算訳）
第7回 物語の読解Ⅲ（同上）／グループ発表のためのシナリオ作成&練習
第8回 グループ発表（3曲） ★時間外：レポート「私の英語史、そしてこの授業で私が学んだこと」

なお、次年度からは授業時間と評価のしくみを変更される。1コマが85分から90分となり、8コマ目だけが45分になる。そしてその後の45分が授業時間外扱い(★)となってそこで「試験・レポート」を実施する。授業者はその結果に基づいて6段階の評価をつける。シラバスには準備学修についての具体的な指示を記載する。以上のような点である。

そこで私は評価のために上記のようなレポート課題を課すことにした。また準備学修の指示は次のようにする。「授業で用いる歌（there's a hole in the bottom of the sea / you are my sunshine / the cruel war.）については、題名でネット検索すれば音源や映像が見つかります。前もって視聴しておくことをお勧めします。また、最後の45分間にまとめるレポートのテーマのひとつは「私の英語史」です。これまでの英語学習体験をふりかえって、自分が書きたいことを少し整理して簡単なメモをつくっておくといいでしょう。」

なお、このシラバスの締切は8月中旬である。本稿を読まれた方で何か気づかれたことがあればご指摘していただけるとありがたい。最後にもうひとつ。you are my sunshineで検索したらいくつもの音源が見つかったが、その中にJasmine Thompsonという歌手がいた。初めて知る名前でも他の歌もいくつか聴いてみたが、なかなか魅力的な歌声である。日本で言うと宇多田ヒカルのような存在なんだろうか。近ごろは若い人の聞く歌を全く知らないなので、この件についても何かご存じの方があれば教えていただきたい。(2018/06/11、改訂 2018/06/22)

<註>

1. 面接授業の評価項目は6つあり「そう思う4」「ややそう思う3」「あまりそう思わない2」「そう思わない1」の4段階に分かれる。今回の結果は以下のとおりだった。(31枚)

	4	3	2	1
(1) わかりやすかった。	29	2	0	0
(2) 役に立つ内容だった。	22	9	0	0
(3) 質問や議論のしやすい雰囲気があった。	30	1	0	0
(4) この授業で使用した教材教具等は適切であった。	27	4	0	0
(5) この授業を選択する際にシラバスは役立った。	21	9	1	0

(6) 受講にあたり、準備学習を充分に行った。

7 6 9 8

前年度と比較すると、項目(5)のシラバスについては大幅に改善された。これは今回のシラバスは前年の授業が終わった直後に、頭に残っていた生々しい時間感覚を生かして作成したからである。また項目(6)については次のように分析できる。次年度からは「学生へのメッセージ」の中に「準備学修等」という文言が追加されるのだが、今回のシラバスにはそれがない。にもかかわらず13人が「行った」と答えているのは、おそらく1日目が終わってから家(あるいは宿)で行った学修のことを頭に思い浮かべているのだろう。机間巡視をしているときに私は数名の受講生が初日の授業でやらなかった和訳プリントにも書き込みをしているのに気づいた。次年度は本文の最終節に示したような「準備学修」の指示が出ているのでこの項目の4と3はかなり増えると予測している。

次に裏面に書かれていたコメントのひとつを紹介する。50代の女性である。「英語が苦手です。今までに何度も挫折してきた者への心遣いが先生のお話の端々に感じられました。英語は留学したり海外生活をしたことのある人のものでないと感じることができました」。私は自分がどんなことを話したのだろうかと思い出してみた。おそらくは次のような話だったのではないかと思う。「学ぶ、ということは本来は面白くて楽しいものだと思います。もちろん英語もそうですよ。それなのに単語はこれだけ覚えよとか、この表現は大事だから言えるようにしておくといいとか、そんなこと言うからみんな英語が嫌いになるんですよ。使わないものを覚えよと言う。私もかつてはそんな教師でしたが。でも詰め込んだ英単語を憶えてるのはよくて試験までで、試験が終わればすぐに消えてなくなりますよ。どうしてかって言うと使う機会がないからです。使わないものは忘れるんですよ。寺島メソッド創始者の寺島隆吉先生はこれを「ザル水効果」と呼んでます。ザルで水を汲んでも水はちっとも溜まらないでしょ。これは日本語にもあてはまります。私はワープロやパソコンを使うようになって漢字が出て来ないことがよくあります。買い物メモを作るときでも国語辞典を開くことがしょっちゅうですよ」。この話をいつしたのかは定かではないが、にこやかに頷く顔がいくつもあったことを憶えている。また彼女のコメントの後半部分もとても興味深い。仕事や生活では英語をほとんど使うことのない国において、ではいったい何のために英語を学ぶのか。彼女がこの授業をとおしてその解答を見つけたことが伝わってくるからである。

2. この研究所の正式名称は「国際教育総合文化研究所」といい寺島隆吉氏(元・岐阜大学教授)が主宰している。氏が岐阜大学を退官した後にそれまで活動していた「英語教育応用記号論研究会」を発展的に解消して設立したものである。研究分野は「英語教育」だけにとどまらず「国際教育」「平和研究」「文献翻訳」「教材作成」さらには「食文化」「健康法」「スポーツ」などにまで及んでいる。

3. 1日目の教材 Do-re-mi Song では角括弧[]は直前の名詞を修飾すると説明して英語は「後置修飾」だと強調したが、次の教材 Edelweiss の英文和訳のときに次のような質問が出た。You (look) happy [to meet me]. の [to meet me] も名詞の後置修飾なのか、という疑問であった。私は「この角括弧は動詞 look に掛かっているのもそれとは異なる。[]は名詞に係る形容詞的な場合と動詞に係る副詞的な場合もある」と答えた。

二日目の最初に行った前日の復習では本文で述べたように「A next to B」「A next to B next to C」を用いて形容詞的な後置修飾の説明をしたのだが、その後続けて以下の例文

を示して同じ[on the desk]でも文脈によって意味が異なることを補足した。前日の質問を他の受講生にも紹介したいと思ったからである。

{	The pen [on the desk] (<u>is</u>) mine.	形容詞的 [机の上の]→ペン
	He (<u>put</u>) his pen [on the desk].	副詞的 [机の上に]→置いた

なお、文脈を判断するのは母語力である。なぜなら「彼は机の上のペンを置いた」という日本文の不自然さに気づく必要があるからだ。今回は上記の例文を使ったが、次年度に There's a hole.を採用するならばその英文で今の説明が可になる。

{	There's a hole [in the bottom of the sea].	
	穴がある 海の底に	
{	There's a log [in the hole [in the bottom of the sea].	
	丸太がある 穴の中に 海の底の	

いまは前置詞句が2つの意味を持つことについて述べたが、「後置」に関しては少し別の観点からも書き留めておきたいことがある。寺島(2000:29)は英語と日本語を対比させた表において「英語はほとんど後置修飾、日本語は前置修飾のみ」と述べているが、「ほとんど後置修飾」の具体的な中身については「前置詞句や関係詞節はつねに後置修飾でありながら、形容詞だけは前置修飾になり、属格はふたとおりある」(ibid.28)のように解説している。

この説明の「形容詞だけは前置修飾」については私は something cold や things Japanese (日本の風物) のような例外を知っていたが、最近次のような説明を佐藤・小池(2016:216-217, 204-205)で読んで、まだ他にも例外があることを知った。同書には「走っている少年は私の兄(弟)です」を The running boy is my brother. と英訳するのは誤りで、正しくは The boy (who is)running is my brother.である」と書かれて、その理由を、名詞の前の形容詞は分類的特徴を、後ろの形容詞は一時的な状態を表すからと説明している。

そこには次のような例も示されていた。「あの踊っている少女を見なさい、を Look at that dancing girl.とするのは誤りで Look at that girl dancing.が正しい」。ただ、この英文を見ると「あの女の子が踊っているのを見なさい」とも訳したくなる。はたして母語話者は that girl [dancing] という「被修飾・修飾」とみているのか、それとも that girl(s) dancing(p) のような「主述」の関係ととらえているか、という疑問が起きるが、おそらくは視線が向かう先の違いで決まるのだろう。ただ、The boy running のは is my brother があるので明らかに「被修飾・修飾」の方だろうが。

話が少し横道に逸れたので元にもどすと、同書はさらに、「マニアックな内容に深入り」するが、と断りながらさらに次のように述べている。「a burning candle や an approaching typhoon のように名詞が人間以外では-ing 形は名詞の前に置かれても一時的な意味を表すことができる」と書かれている。だから a barking dog は「吠える性質の犬」という分類的特徴を表すだけでなく「いま一時的に吠えている犬」という意味にもなる。ところが、ま

た、a sleeping baby（眠っている赤ちゃん）は例外的に許容される」。

話をまとめると、「形容詞だけは前置修飾」の中身はかなり複雑だということである。こんな枝葉の内容に教師がふれるのは質問があったときだけでいいと思うが、英文を書くときにはやはり知っておいたほうがいいと思ってここに記しておくことにした。

4. 放送大学・面接授業の「英語授業シラバス」については、毎年発行される冊子で数多く見ることができるが、その実践記録は日本語論文検索サイト CiNii^{サイニー}で見ても堀井ほか(1986)と高山(1995)のわずか2件しかない。参考までに記すと、前者は受講生夫婦と講師との間の書簡の形式を採っている。受講生は教材として採用されたテレビドラマは「泣きたくなくなるほど聞き取れなかった」との感想を述べる一方で、そのセリフをグループで立ち稽古をしてみたかったとの要望を出している。後者の実践では、映画を主教材にしてそれに基づいて課題内容を三段階に分けたワークブックと音声テープを作成している。学習者が自分のレベルに合った問題を選んで自学自習できるようにするためである。また放送大学の学生は「学習歴が様々で学力差が大きい」「学習意欲は非常に高い」（山田による要約）との指摘もあった。これらの先行実践は20～30年以上前のものであるが、今回の山田の実践を引き比べてみると「視聴覚教材」「グループ活動」「自学自習スタイル」といった共通のテーマが出てきて興味深く感じられた。

<引用文献>

佐藤誠司・小池直己(2016)『「英語のしくみ」を5日間で完全マスターする本』PHP 研究所

高山一郎(1995)「主教材に基づいた自主学習教材の製作」『研究報告79』pp.19-25

寺島隆吉(2000)『英語にとって文法とは何か』あすなろ社

堀井修治・堀井瑞子・曾根進(1986)「英語 I」『MME 研究ノート：multi media education 37』, pp.48-53

山田昇司(2005)『授業は発見だ』あすなろ社

山田昇司(2014)『英語教育が甦えるとき—寺島メソッド授業革命』明石書店

山田昇司(2018)「放送大学・面接授業で「何を」「どう」教えたか—19歳から91歳の英語「再出発」」『朝日大学教職課程センター研究報告』第20号 275-309頁

<資料>

本文中に受講生の授業レポートをいくつか引用したが、その他のレポートから3編（A, B, C）を選んその全文を参考資料として添付する。なお、タイトルは文中の言葉を生かして山田が付けたものである。

A 皆の前で声をそろえて歌うのはとても気持ちよかった（50代女性）

英語の授業だということ、グループ学習ということに緊張して来ましたが終わってみれば楽しい二日間でした。

教材はわかりやすいものを選んでいただいて、楽しく勉強できました。「サウンドオブミュージック」は昔に観たことがあります、長い映画で全部を憶えているわけではないですし、少し観ただけでももう一度通して観たくなるようないい映画ですね。

時代的な背景やエーデルワイスにこめられた心情とかをわかって観たり、この歌を歌うと一段と引き込まれるものがありました。

英語に興味がありながら全く上達しないことに加え、超音痴な私が英語の歌を歌えるなんて驚きです。一人では絶対無理なことですのでグループの皆さんに感謝です。皆の前で声をそろえて歌うのはとても気持ちよかったです。

「寺島メソッド」というのは今回のような学習方法のことでしょうか。たしかに今回の授業は”わからない”という感覚より”楽しかった”のですが、英語は継続が必要です。これから自分でこのような学び方をするために何か教材があれば紹介して頂けるともっとよかったと思いました。

資料も、教材もしっかり準備して頂き、おケガをされて不自由な中ありがとうございました。一人一人の質問に丁寧に答えて下さり、また質問すれば必ずほめて下さり、ほんとに英語が苦手な者でも臆することなく学べる雰囲気や大事にして下さって感謝です。

B 英語の力が脳みその奥から発掘されていく感覚（50代女性）

全科履修生で今学期が最後の学期となりました。あと1単位。この1単位を2年間外国語、英語でとるべく頑張ってきましたが、全くダメ。スマホから流れてくる英語の内容は全く把握できず。中高共に成績は良かったのになぜ？好きだった英語がだんだんと嫌いになっている時、ピン！！とききました。スマホの向こうでやっているのはおもしろくない！面接授業ならもしかして楽しいかも。そう思い履修登録時いつもは見ない面接授業の冊子に目を通しました。すると科目名に♪音符？これだ！！ととびつきました。しかし基礎科目中級の、この中級の言葉がだんだん授業の日が近づくにつれて不安材料に変化しました。

グループワーク好きの自分は、先生のこの授業のスタイルはあっているなと思い第1日目スタート！！まずうれしかったのはテキストが見やすい！！これがすごく感動した。老眼鏡をはめても最近は見えにくくなってきたので本当にありがたく思いました。そしてリズムで英語をそしてセンマルセン。すんなりと自分のもっている英語のちからが脳みそ

の奥から発掘されていく感覚でした。(先生が単語訳を右側に記して下さっていたことが大きいですが。)

実は私映画をほとんど見ないのですが、この授業で見たくなりました。それも英語で。できればこんな映画がおすすめですねなど聞きたかったです。それから、センマルセンでおしえていただきましたがもっとこの方法で勉強したいと思いました。

英語嫌いにならずに勉強続けたいと思えるようになりました。

先生は救世主です!! ありがとうございます。

C 音法を学んで「英語のリズム」が腑に落ちた! (40代女性)

私は放送大学の単位もかなり取得し残るは面接授業数単位となりました。数々の面接授業を受けてきましたが終盤になるにつれ、授業を受ける苦痛が増していました。今までグループ形式とか発表があるという様な授業は勇気がなくて避けてきました。

でもあまりに講義だけの聞くだけの授業に飽き飽きしていて今回はおもいきってこの授業に参加しました。先生はそんな学生の気持ちをよくわかってくださりとても心地よく楽しく眠気もなく充実したものとなりました。中でも大変興味深かったのサウンドオブミュージック。名前こそ知ってはいましたが食わず嫌いでミュージカル等の作品は見たことがありませんでした。マリアの歌、自然はもちろんのこと修道院の先生達の歌にも大変感動しました。1日目帰ってから早速アマゾンで注文しました。このような出会いに感謝しています。

また最も重要な英語について自分でも英語の学習をと車の中でCDをかけたりしてはきましたが英語には何が一定のリズムがあるとは感じていたものの解決できずにいました。そんな中で今回の授業で日本語と英語のリズムの違い、音法を学ばせてもらってすごく腑に落ちる瞬間でした。また歌を使うとよりわかり易く体得できて大変良かったです。

実は自分も子供の教育に携わる仕事をしていて昨今の英語教育のあり方に疑問を持つ一人です。小学生から幼児からと英語学習を推奨していますが先生のおっしゃるようによく分からずでも学べるのだということ、楽しく自分がやる気にならないと意味はないと考えさせられました。先生の授業を受けて感じたことを自分なりにもっと考え仕事に教育に生かしていきたいです。

最後に先生のお人柄に大変感動しました。何とか生徒達のためにとという思いが大変伝わり人のためにとはこうあるべきなのかなと人間についても考えさせられました。お体お大事になさってください。授業中ころんしてしまうのではないかと何度もひやひやしました。でも先生はそのお怪我をも人生のプラスにかえていく人なのだとすぐにわかります。益々のご活躍を期待しています。

追記：上掲の作文は授業全体の様子をよりリアルに知ってもらうために紹介したものが、教授者の側から少し補足しておいた方がよいと感じる点があるので以下に追記する。

ひとつは歌の発表に関してだが、タスクの設定を「暗唱」ではなく「視唱」としたことは妥当だったということだ。なぜなら、受講生大半が英語学習からは久しく遠ざかってい

る状態からの再スタートであること、また初めて体験する「リズムよみ」だけでも、そのコツを短時間でつかむのはそれほど容易くはないからである。受講生 A から「皆の前で声を揃えて歌う」心地よさを味わえたという声を引き出せたのは、受講生が「リズムよみ」の練習にだけ集中できて「暗唱」は要求されなかったからに違いない。

ふたつめは、いま述べたことと少し重なってくるが、英語学習における「暗記」の問題について考えることができたことである。受講生 B の語った「自分のもっている英語のちからが脳みその奥から」「すんなりと」「発掘されていく感覚」は「暗記」することからは決して生まれえないだろう。その感覚は "リズム" と "センマルセン" という英語の水源地を「体感」「理解」したからこそ感じることができたのだと私は確信している。この受講生は「中高共に成績は良かった」と述べているので、水源地を学ぶことで「バラバラ」で「冬眠中」だった英語の知識が系統的に再構成されて甦えってきたと言えるかもしれない。また同様のことは受講生 C にもあてはまる。彼女は「英語には何が一定のリズムがあるとは感じていたものの解決できずにいた」が、「日本語と英語のリズムの違い、音法を学ばせてもらってすごく腑に落ちる瞬間でした」と語っているからだ。いずれにしてもこの二人の作文で、英語の「水源地」を「理解」することが、英語学力の養成だけでなく再生・復活にも役立つことを教えられた。

みつつめは、「このような学び方をする教材を紹介してほしい」「もっとこの方法で勉強したい」という要望に応えることである。今回その一部を教材に使わせてもらった『魔法の英語』や書き込みしやすいように大判になったと聞いている『センマルセンで英語が好き！に変わる本』—少なくともこの2冊は次年度その現物を持参して紹介したい。このことを備忘として書き記しておく。